

平成二七年度修士論文要旨

綱島梁川の〈見神〉論と明治末期の文学

益田 拓

本論では、明治末期に流行した綱島梁川の〈見神〉論に注目し、同時代における文学の繋がりについて考察することで、自然主義や反自然主義といった文学史的な対立の中に梁川の〈見神〉論や、その理論的骨子であるプラグマティズムの影響を明らかにした。第一章では、綱島梁川の「予が見神の実験」における修辭上の戦略を分析した。「予が見神の実験」技巧を用いることのない自身の経験の描写を基にして、検証不可能な宗教的真実へと読者を導くプラグマティズムを理論的骨子とするレトリックが用いられていた。

第二章では、第二次『早稲田文学』において〈見神〉論が自然主義とプラグマティズムとに結び付けられていることに着目し、そのつながりを検討した。『早稲田文学』における自然主義的な文学とは、技巧を用いることなく、主観的な内面の告白がすなわち社会における客観的な真実となり得るものを指し、〈見神〉論やプラグマティズム的な要素をもつ作品であることを、小栗風葉「青春」の分析をもとに明らかにした。

第三章では、自然主義と対極におかれる反自然主義的な作家と

して位置づけられている泉鏡花が書いた連作小説「春昼」「春昼後刻」の分析を行った。この作品には〈見神〉の実験が物語の中で引用されており、かつ、第一章で見た「予が見神の実験」の修辭上の戦略が用いられていることを明らかにしながら、反自然主義的な立場における鏡花においてもまた〈見神〉論やプラグマティズムに関連する要素があることを明らかにし、その上で、鏡花の描写論を検討した。鏡花の描写論もまた、主観や客観という対立に囚われることのない、新たな文学の在り方を模索するものであった。

終章では、自然主義と反自然主義という、新旧の争いの歴史としての文学史の両極の中間項として〈見神〉があつたことを踏まえ、〈見神〉論が、同時代の作家達が目指した新しい文学のパラダイムと深く関係していることを示唆した。

以上のように本論は、〈見神〉論といった歴史的社会的な文脈を補助線としながら明治末期の文学を顧みること、これまでに蓄積されてきた文学史という仮構物に対する、別様の可能性としての文学史を紡ぎだすことを試みた。

岩 永 一 啓

限定副詞の中に、先行研究や辞典で意味を「比較・選択・評価・判断」とされる「むしろ」がある。他の似た意味の限定副詞よりも価値・状況・能力・範囲・程度の差を幅広く設定することの出来るのは「むしろ」だ。しかし近頃、文頭などにおいてこれらの意味の希薄な使用がされているように感じた。たとえば、

(1) X:「困ったことがあるんだ。助けてくれないか。」

Y:「むしろなにをそんなに困るんだよ。」

(2) X:「課題の印刷した？」

Y:「むしろまだ書いてない。」

(3) X:「Yの話ってたまに下品だね。」

Y:「ごめんね。」

X:「あ。むしろおもしろいよ。」

類似したものに形容動詞「逆だ」の連用形「逆に」がある。たとえば、

(4) X:「お前授業にちゃんと出てるのか？」

Y:「逆になんで出てると思ったんだい。」

(5) X:「明日は車で行こうかな。」

Y:「逆に電車でいったらどう。」

X:「いや、車なら逆に早いから、そうするつもりなんだ。」

「逆に」について『現代用語の基礎知識2015』には「口グセ」の項目として「「実際のところ」「別の見方をすれば」くらいの意味でつかわれる。」と記述されている。このことから「むしろ」「逆に」に従来の意味よりも意味が弱まった、または変化した新用法が出てきているのではないかと考え、その検証を研究の目的とした。

意味論・構文論を中心に新用法として研究を行い、「むしろ」では新用法と従来用法の間で前後にくる言葉の「評価的条件」に違いが見られ、別の用法と見なす根拠になった。

「逆に」では「語彙的制約」の差は見られなかったが、「評価的条件」では新用法は比較項Aにくるものが、基準であることよりも話者にとって想像しがたいものや意外性のあるものという要素が強く、そして比較項Bの反対の程度にも差が見られた。「逆に」の新用法は「むしろ」の新用法に近いものと考えられる。「評価的条件」の比較を行うと、比較項Aでは、ともに話者にとって考えられない意外性を持ったものが入るという点が共通している比較項Bは「否定する」と「反対」という近いニュアンスを持っていることが分かった。

「オノマトペ+する」研究

Nguyen Thi Bich Tram

どの国の言語もオノマトペは豊かな単語の宝庫の中の大切な一部である。それに日常生活のコミュニケーションでオノマトペでもオノマトペはよく使われている。日本語を学習する外国人にとって、日本語オノマトペは非常に複雑である。そのため、日本語の学習と研究は簡単なことではない。しかし、難しいからこそ学習者と研究者に対して面白さを与えてくれるものである。

本論は「オノマトペ+する」形式に着目し、アスペクト、「と」の使用の分析、文の構成の分類を検討した。また、認知の観点でオノマトペから「オノマトペ+する」形式への意味の拡張について検討した。

オノマトペと「オノマトペ+する」形式の意味・用法について検討し、このような語の特質や文法特性を明らかにした。「こそこそする」「ちくちくする」「ごろごろする」「ぴりぴりする」「ばたばたする」が分析の対象である。小野『擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典』とコーパスを参照し、意味面と文法面に關し、「オノマトペ+する」形式の特徴を明らかにした。

オノマトペの指導・学習について少し述べておきたい。オノマトペを学習するとき、共感を持ち、興味があれば、身につけやすくなると思われる。したがって、初級・中級レベルから、教科書で現れるオノマトペを指導するときには、関連語も一緒に入れて説明し、できれば生教材（漫画、新聞、インターネット、アニメ等）も利用することが良いと思う。オノマトペ指導は重要な課題だと考えられる。

あらゆる教科の学習の前提として必要な言語能力の効果的な育成方法 ——勤務校における実践をふまえて——

中井政治

本論文は、生徒の学習能力の向上を目指し、様々な教科の学習の前提となる言語能力の育成方法を考え、実践し効果を検証したものである。

第1章では、これまでの勤務校で学習指導をおこなってきた生徒たちの現状と問題点、改善法について述べる。そこには、語彙の少なさから、教科書に出てくる言葉（用語）の意味が理解できないために文意が読み取れない、すなわち学習内容に入り込めない生徒の苦しさがあった。それは、言語活動を活発化させることにより改善できるのではないかと考えられた。

第2章では、現任校（奈良県立山辺高等学校）において総合学科の時代に取り組んだ内容について述べる。総合学科のクラスでは生徒達の選択する授業内容は多岐にわたる。まずはクラス担任として読書活動を推進することにより、どの教科の学習にも役立つ言語能力の向上になることが明らかになった。また、言葉の学習に主眼を置いた学校設定科目「チャレンジ日本語」などを設け、実施した。

第3章では、現在、3年次の生物科学科植物コースの生徒および普通科生活文化コースの生徒に対し、おこなっている学校設定科目「新聞活用」および「読書」の授業内容および効果について述べる。

第4章では上記の取り組みについての考察と提案を述べる。

言語能力の効果的な育成における「新聞活用」および「読書」の組み合わせは、画鋲理論と名付けた仮説に基づく。「新聞活用」の授業を通してこの世の中で起こっている様々な事象に触れ、現代社会で必要な語彙の習得につなげる。それと並行して行なう「読書」の授業では、1つのテーマについて書かれた作品を作者の意図を念頭に置きながら、最初から結末まで読み通して思考の深化を図る。幅広い語彙と深い洞察力の育成、この2つを通して言語能力を高めることが、あらゆる教科の学習理解に寄与すると考える。

まだまだ、端緒についたばかりで、授業内容(題材)の選定や授業方法の改善が必要と思われるが、今後も継続して取り組みたいと考えている。